

漢法苞徳塾資料	No. 119
区分	治療論・補瀉
タイトル	手技の補瀉について
著者	八木素萌
作成日	

◇鍼灸治療は、目的に適った鍼具または灸を使って、経絡・経穴を補し或は瀉して、臓腑間・経絡間の調整を行なう。この事を介して人身の動的平衡を回復せしめる治療法である。疾病の治癒は、本来病人の抗病力の発動であるが、東洋医学は回復力を高揚させて治病に導こうとする医学・医術であるが、鍼灸治療は東洋医学の基本的構成部分である。経絡・経穴を「補し或は瀉して」治療するためには、「実を瀉し」「虚を補す」のであるから「虚」や「実」の診定と病位の把握と病因の判定が極めて重要である。また補瀉する技術が適切で無いと、治病の目的を達成することは出来ない。

「補」「瀉」には「配穴の補瀉」と「手技の補瀉」とがある。これには、臓腑と経脈の関係・臓腑や経脈の間の相関関係・臓腑や経脈の陰陽五行論的な、或は臓象論的な関係、或は病症学的な性質、などの知識——つまり東洋医学の理論と技術によって——に基づいた診断と、この判断と治療論に従って、適当な治療方針が選択され治療プログラムが樹てられる、この採用された治療方針に相応する運用論に精通する事と共に、補瀉の手技を適切に適用できる技術が、要求されるのである。

『難経』には、「配穴の補瀉」と「手技の補瀉」との厳格な結合・一体的運用を求められているが、良い治療を保証する為にはこの立場に立つ事が必要である。

◇手技の補瀉を研究するとは、つまり、刺法を研究する事である。

手技の方式を知ることが必要であるから、今日において基本的な手技と言われているものを表にして記述する。

然し、技術的には、「補」とはどう言うことか「瀉」とはどう言うことか、この技術的な根本点を、しっかりと認識して置かなくてはならない。従って具体的に手技手法を記述する前に、「補」「瀉」の根本的な事柄について述べる。

◇活力・元気などと呼ばれているものが不足する状態、換言すれば「正気の不足」の状態を「虚」と言う。病気を引き起こすものを「病邪」とか「邪気」と言う。「実」とはこの「邪気」が「正気」に勝っている状態にある事を言う。つまり「虚とは正気の不足」を言い「実とは邪気が正気に勝っており有余である」状態を言う。故に「補」は不足している「正気」を「補」充する事である。「瀉」とは「邪気」を捨て去り「瀉」出することである。

- (a) 「元氣」は「陽氣」であり、この「陽氣」は「穀氣」であり、体を温煦するものである。この「陽氣」は、身体の「陽」の部に存在しているので、これを鍼先に集めて、経脈の内に送り込み、或は身体の陰奥に推入する様に、鍼を操作する事が「補」法である。

「陽氣」は体を循環しているが、この通路が「脈」(血脈と経脈)である。「陽氣」は体表では、「衛分」「氣分」に機能し作用している。体を機能させ温煦しているものとしては、「経脈」がより基本的なものと認識しているのである。

体表部では「経脈」は「絡」「孫絡」(皮部・経水も含んで解される)持っていて、全身を隈なくカバーしている。これを、別の表現では「衛氣」の温煦の作用を、暖かい蒸気が潤し温ためるように身体に機能している、と比喩的に言うこともできる。この事から、「水」と「火」の交流・相互作用が、この蒸気を生み出す事に例えられている。

この「胃氣ハ陽氣ナリ」「穀氣ハ陽氣トナル」と言う事と、「陽氣ハ水火交流ノ氣デアル」と言う事とは、矛盾するものでは無く、一つは「氣血」の角度から、一つは「経脈の性質の相互的機能」の角度から説明している「一つの事柄」である。

この「陽氣」が十分であれば人は「元氣」で居られるのである。「陽氣」を集めて体内に加え入れる様に鍼を操作するのが「補」法である。体にあっては「陽氣」が多い所は、浅表の部(衛分と氣分)と四肢とであるから、四肢の重要穴を用い、また、体表で鍼を操作して鍼に「陽氣」を集めて、これを体内に或は脈中に推し入れる。そして、その気が洩れない様に留意した操作をする。これが「補法」手技の根本的なものである。故に、「補法」に成功すれば、そこが暖まり活力が増すのである。

- (b) 「実とは邪氣の実」であることから、「瀉法」とは、この「邪氣」を体外に排出せしめる鍼の操作法のことである。「邪氣」は身体の機能を損傷させ、また、形態・組織をも影響を及ぼし、時にはそこに直接的に侵襲してそれを損耗させるものである。その意味からは、「陰氣」とも言換えられる。「陽性の邪」は「熱」(機能の異常昂進)となり、「陰性の邪」は「寒え」(機能低下・機能停滞)となる。「陽熱」(熱は陽的なものであり、体の陽の部に熱邪が侵襲している状態)は、体を外邪から護衛している「衛分の氣」「衛氣」をたやすく耗散させる。そして、発汗させる。汗は津液であるから、此れは津液を奪うことであるが、津液は血が変化したものであるから、「陽邪」は陰く身体での>を傷ぶり易いと認識されている。

津液が耗散されて、「乾燥状態」になると「虚熱」を生じる。これは「内熱」として表出する。この熱は「解熱」させようとして、陽分を瀉しても下がるものではない、故にこの様な「熱症」の状態は「火証」と呼ぶ。この「火証」は陰虚による熱であるから、陰の部に陽氣を入れて、陰の部を「補」す事が必要であるし、同時に津液を増加させてやろうとする事が必要である。こう言う方法を、「清熱」・「浄熱」の法と言い「解熱法」とは言わない。

「陰邪」「陰性の邪」は、寒冷・涼湿・沈滞・沈潜の性質の邪であるから、「陰邪」に冒されると「陰実」の状態になり、暖まらない・沈滞する・冷える・停滞する・などを軸とした、種々の症候が現われる。外から体を冒すとき、「陰氣」は「衛氣」を「外束する」、やがて「衛分」

に「正気」が動員されて「邪」と戦うので発熱をおこす事になる。深く体内に侵襲すれば、陰分の病となる、これは「直中」とか「表裏伝」と言われる。

身体では「陰気」は、「榮分」・「血」分にあり「津液」に在る、この「血」の滞留が、陰での「邪実」である。「陰気」を、体表に引き上げる、また、さらにそれを、体外に捨て去るよう
に鍼を操作するのが「瀉法」である。

故に「瀉法」に成功すれば、局所が冷えるのを覚え、不快な充満感や腫脹したハバツタイ感じは衰える、強張っている所はシナヤカになり柔軟虚軟となる。

つまり、「瀉法」の根本は、深部・陰の部から、鍼先に陰気を集めて、これを体表に引き出し、必要ならば、その引き上げた陰気を、捨て去ってしまう様に鍼を操作する事である。

◇基本手法としては、

- (a) 「現代鍼法 17 種」
- (b) 「古法 14 種」
- (c) 「中国現代基本手術・複合手技 7 種、単独手技 14 種」
- (d) 「杉山流基本手技 18 種」

などがある。

(a) 現代手技 17 種～

- イ. 単刺術
- ロ. 雀啄術
- ハ. 間欠術
- ニ. 屋漏術
- ホ. 振顛術 (竜指術・細振術～弾振法・弾爪法)
- ヘ. 置鍼術 (留置術)
- ト. 旋撚術
- チ. 廻旋術
- リ. 乱鍼術 (乱刺術・乱刺法・強直法)
- ヌ. 副刺激法 (気拍術)
- ル. 示指打法
- ヲ. 随鍼術
- ワ. 内調術
- カ. 細指術
- ヨ. 管散術
- タ. 鍼尖転移法 (鍼尖移動法)
- レ. 刺鍼転向法

(b) 古法 14 種～

- ・動
- ・退
- ・搓
- ・進
- ・盤
- ・揺
- ・弾
- ・燃
- ・循
- ・捫
- ・摂 (撮)
- ・按
- ・爪
- ・切

このほかに、飛・伸 の手法も、古くから伝えられている。

(c) 中国基本手術～

複合手技 7 種～

- ・焼山火
- ・透天涼
- ・陽中隠陰
- ・陰中隠陽
- ・竜虎交戦
- ・蒼竜擺尾
- ・白虎搖頭

単独手技 14 種～

- ・揺擺法
- ・九六法
- ・徐疾法
- ・提挿法
- ・進鍼補瀉法
- ・捻鍼補瀉法
- ・留鍼補瀉法
- ・抜鍼補瀉法
- ・迎随法
- ・開闔法
- ・呼吸補瀉法

- ・納支法
- ・颯柄法
- ・飛旋法

(d) 杉山流基本手技～

基本18種～

- ・雀啄術
- ・随鍼術
- ・乱鍼術
- ・屋漏術
- ・細指管術
- ・四傍天の術
- ・四傍地の術
- ・四傍人の術
- ・三調術
- ・氣行の術
- ・三法の術（マタハ三刺ノ術）
- ・円鍼術
- ・温鍼術
- ・暁鍼術
- ・内調術
- ・氣拍術
- ・竜頭術
- ・熱行の術

◇若干の解説～

『黄帝内経』・素問・靈枢には、「五臓に应じる刺法」・「五刺」・「十二刺」・「十二経に应じる刺法」・「九刺」その他が記述されている。刺法に関する記述のある篇を紹介するので、学習すると良い。

また、そこに記述されている、若干の単独手技について、補瀉論的な説明をして置く。実際の臨床で用いられる時は、単独の手技を組み合わせ、複合手技として用いている。

『黄帝内経』の刺法手技に関して記述されている篇について～

『素問』では、「鍼解第54」・「刺要論第50」・「宝命全形論第25」・「調経論第62」・「離合真邪論第27」など。

『靈枢』では、「九鍼十二原第1」・「刺節真邪第75」・「小鍼解第3」・「経脈第10」・「根結第5」・「終始第9」・「官能第73」・「官鍼第7」など。

◎徐疾の補瀉の法～～

徐に刺入し疾に抜去するは補、
疾に刺入し徐に抜去するは瀉。

◎呼吸の補瀉の法～

呼に入れ吸に抜くのは補、
吸に入れ呼に抜くのは瀉。

注 『難経』78難に「非必呼吸出内鍼也」として「得気因推而内之・是謂補」「動而伸之・是謂瀉」と言う。つまり呼吸のタイミングよりも大事な事は「得気」したものを体内に推入するのが「補」であり、鍼を動揺させて鍼孔を開くようにして「気」の排出を企図するのが「瀉」である、と言う。

◎開闔の補瀉の法～

速やかに抜き即座に鍼孔を閉じるのが「補」、
緩慢に抜き去り鍼孔を閉じないのが「瀉」。

◎迎隨の補瀉の法～

(二種類)～

- a. 経脈の流注方向に順に刺鍼するのが「補」、
経脈の流注方向に逆らう様に刺鍼するのが「瀉」。
- b. 経脈の接続の序列・順序に順に取穴して刺鍼するのが「補」、
逆に配置して取穴するのが「瀉」。

注 (イ)『難経』79難には、「迎而奪之者瀉其子也・隨而濟之者補其母也」と言う。
つまり、子母の配穴による「補瀉」の事であると述べている。

(ロ) 納子法によると、経が旺気する時間帯の前半と後半との、何れの時に取穴するかによって「迎隨」の「補瀉」を言う。

◎押し手の補瀉の法～

特に鍼の抜去時の押し手の操作が問題であり、
上下圧を強くして鍼を抜き、鍼孔を閉じないのが「瀉」、
左右圧を強くして鍼を抜去し、間髪も入れずに鍼孔を閉じるのが「補」。

◎提挿の補瀉の法～

雀啄法の補瀉と同義である。

柔らかく緩慢に短いストロークで雀啄するのは「補」、
強く手早く長ストロークで雀啄の操作を行なうのが「瀉」。

◎その他～種々の単独的な手技がある。

例えば、撚鍼術の場合であるが、

鍼の回転を優しく緩やかにかつ回旋角を小さく撚鍼すれば「補」となり、
手早く強く回旋角を大きく撚鍼すると「瀉」になる。

この様に、

優しく緩和に操作する場合には「補」の刺法となり、
強く厳しい操作の場合には「瀉」の刺法になる。

一般的にはこの様な傾向がある。

◎鍼響や効果を、目的の部位に到達させる技法がある、大いに研究する事が必要。

◇手指・手掌の訓練

- ・日常の手入れ
- ・ツボを撮る

[い]「分肉骨節にあらざるなり・気の遊行出入する処なり」